



Title	Franz Fanon : Peau noire, masques blancs
Author(s)	海老坂, 武
Citation	言語文化, 3: 99-103
Issue Date	1966-11-03
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/9189">http://doi.org/10.15057/9189</a>
Right	

was enraptured with all the cultural goods that came along with her—the Russian face, the Russian name, the Russian blouse, the Russian woman and the Russian devotion to causes.

(p. 132)

という具合で、たいへんなロシア好きであるが、the Russian devotion to causes などといわれると、あれほど革命を非難したのに (cf. 第三章) たいした変わりようだと思わざるをえない。惚れてしまえば何とやらというところだろうか。本章の後の方で、ますます激しさを加えて行くナチズム、ファシズムの勢いについて述べてあり、the approaching storm was to hit some people more than others (p. 146) と締めくくっているのは、この当時の状況を象徴的に示しているといつてよからう。

第六章は 1940 年で、1930 年代の締めくくりにはずだが、それにしてはいささか弱い。主として Mary McCarthy と Philip Rahv について述べられている。引き続いて epilogue となるわけであるが、1945 年と題される最終章も、1940 年と 1945 年の状況の相違が指摘されているにせまり、その相違がいかなる意味をもつのかは問われていない。問題提起として受けとれないこともないが、それでもなお、その対象は読者であるのか、著者自身なのかという疑問が残る。ただ、この epilogue で注目されるのは、1940 年において depression was over (p. 165) という感を抱かせるにいたった工業技術力の発展に対して、それを古い社会の終焉と感ずても、新しい社会の出発とはみない態度である。この観方には異論もあろうが、一つの時代観として面白いと思う。

以上みてきたように、本書は時代を追って、各時代における人間観、社会観を述べているものであるが、両者のバランスがうまく

とれているとはいいい難い。ある時は人間を、ある時は社会を重点的に描いている。それでいいのだと思う。ただ、すぐれた批評眼を持っている著者のことであるから、読者としては、もう少し全体にわたって、問題を自分にひきつけて考える態度が欲しいと思う。この点では、前の方で触れておいた Van Wyck Brooks の、*Days of the Phoenix* に一歩を譲るといわねばならない。著者は Starting out in the Thirties というが、われわれは and going to where? と問いたいのである。その行きつくところはどこなのか。やがて答がきけることを期待したい。

本書は 200 頁たらずの小さな本であるが、中に含まれる問題は大きい。少しでも 1930 年代に興味を持たれる方は、一読されれば、何かしらうところがあると思う。

Alfred Kazin: *Starting Out in the Thirties*, Atlantic-Little, Brown 1965

## Franz Fanon: *Peau noire, masques blancs*

海老坂 武

フランツ・ファノンとは 1924 年、西インド諸島、マルチニク島に生まれた。フランス本国の大学で精神医学を修めた後、アルジェリアのブリダの病院に臨床医として数年勤務した。それが彼のいわば前半生である。1954 年、アルジェリア革命が勃発。ほどなくファノンは、フランス国籍と精神科医の職を放棄して、アルジェリア民族解放戦線 (FLN) の活動に参加 (1957 年)、その機関紙の『エル・ムジャヒド』の理論的指導者の一人となった。革命家としてのこの後半の生涯は、1961 年、

アルジェリア独立の前夜、ニューヨークの病院において閉じられた。遺体は解放軍の兵士によってひそかに〈祖国〉アルジェリアの土に埋められたという。

37年の短い生涯の背後に、ファノンには4冊の書（1冊は死後刊行）を残した。『黒い皮膚、白い仮面』はファノンの第一作であり、1952年に発表された（1965年再刊）。すなわち、フランス国籍を持つ、マルチニック島出身の黒人、精神科医ファノンの手になる書物である。

全体は7章から成り、序論と結論とがつけられている。

「黒人と言語」「黒人の女と白人の男」「黒人の男と白人の女」と題された前半の3章では、白人の世界において黒人がとるさまざまな態度、振舞を、著者は言語と性とを二つの軸として、つまり植民地本国の言語（ここではフランス語）に対する黒人の屈折した心理と、白人の異性に対する男女黒人のコンプレクスとを中心に据えて、客観的に分析し診断する。ここではむしろ、「黒人の魂」とか「黒人の本質」とかが入り込む余地はない。考察の対象は、徹頭徹尾、白人世界における対他存在としての黒人の意識である。ここには、精神科医として獲得した知識と体験とが十分に活用されている。精神分析的な理解こそ黒人問題解決の第一歩である、と確言する。出発点におけるファノンの意欲をここに見ることができよう。序論の中で彼は次のように書いている。「この作品は臨床研究である。そこに自分の姿を認める人びとは、一歩前進しているのだと私は思う。」白人の世界に生きる黒人の意識の自己疎外——それは白人になりたいという欲望と白人に対する憎しみというアンビヴァランスとして示されるのであるが——を黒人の読者につきつけて、診断を同時に快癒への誘いとすること、ここにファノンの第一の意図がある。なお精神分析学に

対するファノンの態度は、「シェールレアリズムだけがアフリカニグロ奴隷の子孫たちをタブーから解放し、彼らの総体を表現できる」と主張していた、前世代の黒人の詩人たちのそれと、正確に対応することも注目値する。

次に、第4章は「いわゆる被植民者の従属コンプレクスについて」と題され、章全体が『植民地化の心理』を書いたマノニに対する批判にあてられている。植民地のラシズムが他の形態のラシズムと異なるものではないこと、ラシズムは経済条件と密接に結びついた一つの体制であること、被植民地者のうちに見られる従属コンプレクスなるものは、天然の所与ではないこと、等々。

次にくる第5章「黒人の生体験」はこの書の中でもっとも重要な箇所であろう。ここでは、意識下のコンプレクスはすでに問題ではなく、白人の文明の中で、オブジェとしての、対他存在としての皮膚の黒さを、自己の全責任において引き受けるところから始まる意識の葛藤が記述される。そして対象はほかならぬファノン自身なのである。

「辱められ、抑えつけられていた黒人が、昂然と身を起し、石のように投げつけられた〈ニグロ〉という言葉拾い集める。白人の眼の前で、誇らしげに黒人としての復権を要求する。」

黒人の原体験ともいべき瞬間をサルトルは上のように語っているが（『黒いオルフェ』）、ファノンの原体験もこれと異なるものではない。「ママ、ニグロがいる、こわい！」という白人の子供の恐怖の前に、ファノンは愕然として自己の〈歴史性〉を発見する。黒人であるとは、黒い皮膚を有するというにとどまらない。種族や祖先の過去の一切を、精神の発育不全も、物神崇拜も、食人の風習ですらも自分の〈歴史性〉として背負わされる

ことである。そして一人の黒人の行為の原本性 (authenticité) とは、この歴史性をどの程度直視し、どのように引き受け、乗り越えてゆくか、にかかってくるであろう。

だが……私はいまファノンの試みを定義しようとして、「直視する」「引き受ける」「乗り越える」と安易に書きつらねた。だがじつは、ファノンの書く一行一行が、こうした言葉の観念性を弾き返してくる。われわれ黒い皮膚を分け持たぬ読者の知的理解の抽象性を吹き飛ばしてしまうかに思われる。というのも、ここにぎっしりと詰め込まれているのは、白人世界の中で黒い皮膚を有しているという事実を、直視し、引き受け、乗り越えるという行為の、知に帰しえない、いわば実存的な重みだからである。この重みを背後にひきずりながらファノンは模索する。その模索の過程をそのまま読者の前に提示する。そこでは過去の歩みの反省と、現在営まれつつある思考とがしばしば入り乱れている。あらゆる時称が混然と共存しているパラグラフも少なくない。思索の動きを引きつける二つの項、その一方の項は、黒人も白人と同じように人間であることを白人に認めさせようとする理性の立場、他方の項は、黒人の伝統文明を価値化することにより、黒人としての人間性を肯定しようとする感性の立場である。前者は合理主義に、後者は非合理主義に通ずるであろう。前者の弱点はその抽象性にあり、後者は過去への後退を意味している。ファノンはこの二つの項を往き来しているかにみえる。一方に頭をぶつけては引き返し、他方につまづいてはまた引き返しながら。だが、とりわけファノンが問うのは、第二の立場、ネグリチュード (Négritude) の誘惑、過去の黒人文化の偉大さの幻惑に対してである。この過程で、ネグリチュードを白人の優越性のあとにくるアンチテーゼ、弁証法の否定的契機として捉えたサルトル (『黒いオルフェ』) の〈合

理主義〉に対する批判、というよりはむしろ恨み言が述べられている (「ジャン＝ポール・サルトルはこの研究において、黒人の熱狂を台なしにした。歴史の生成に対して、予見の不可能性を対置すべきだったのだ。私は是が非でも、ネグリチュードの中に身を溺らす必要があったからだ。」)。

この意識の袋小路からどのようにして抜け出してゆくか、その筋道はかならずしも鮮明に語られてはいない。ただ、第5章以後、「ニグロと精神病理学」「ニグロと認め合い」の2章を径て結論へ近づくにつれ、ファノンは一つの新たな〈人間〉の立場を獲得してゆくように思われる。この場合、〈人間〉とはもう「白人と同じように」のあの人間ではなく、白一黒を越えた地点での絶対肯定としての人間である。白い皮膚と黒い皮膚との牢獄に閉じ込められた〈人間〉を解き放つことが問題とされてくる。同時に意識は行動へ、反省は闘争へと差し向けられる。人種問題は抑圧の一形態であることが確認され (「黒人問題は白人の間で生きる黒人の問題のうち、解消されず、資本主義の、植民地主義の、たまたま白人のものである社会によって、搾取され、奴隷化され、侮蔑された黒人の問題なのである。」)、人種問題を解決する唯一の手段は、一人の人間として、非人間的なあらゆる疎外に対し闘う以外にはないことが望見される (「私の行為を私に命ずるのは黒人の世界ではない。私の黒い皮膚は特殊な価値を受託しているわけではない……人間として私は、2, 3の真理がその本質的なあかりを世界の上に投げかけるべく、死の危険をも冒すことを誓約する。」)。ここではもう、過去の黒人文化にいかなる場も残されていない。「15世紀に黒人文明が存在していたことが発見されたとして、人間であることの免状が私に授与されるわけではない。望もうと望むまいと、過去はどんな仕方であれ現代において私を導くこと

はできない。」意識による肉体の、現在による過去の、自由による宿命の克服、これが『黒い皮膚、白い仮面』の結論におけるファノンの叫びである。

彼の文体は、いわば宣言書の文体である。動詞を省略した、断ち切られたような句、être (……である) という動詞による断定的な文の繰り返し、前置詞によって名詞をいくつもつなぎあわせてゆくぎくしゃくとした語法、これらがすべて一つのリズム、ダイナミズムを作り出している。ファノンの意図が、黒人の心の底々、隅々まで仮借なく抉り出し、一つ一つの句を、これを読む黒人の意識に鋭い針のごとく突き立てることにあったとするなら、それはみごとに成功しているといえよう。

今日、ファノニズムの名で呼ばれ、「世界の全大陸に強烈な反響をまきおこし、第3世界の問題を論ずる際に、これになんらかの形でふれぬことは不可能になった」(ジャンソン) ファノンの思想の全貌を捉えるには、『黒い皮膚、白い仮面』以後に発表された、『アルジェリア革命第5年』L'an V de la Révolution algérienne (1960)、『飢えたる者』Las damnés de la terre (1961)、さらに死後集められた論文集『アフリカ革命のために』Pour la Révolution africaine (1964) についても語る必要があることはいうまでもない。ファノンの生涯に二つの時期があるように、彼の作品にも二つの時期がある。『黒い皮膚、白い仮面』がフランス国籍の黒人の精神科医による、意識の自己解放の呼び掛けであるのに対し、後の3冊は、アルジェリア国籍を選び、民族解放戦線の鋭な理論家となった人間の、アルジェリア革命に即して構想された社会革命論である。そこで、ファノニズムなるものも、革命家ファノンの書物についてこそ語るべきかもしれない。また、彼の生涯をきっぱりと二つに区切った行為、国

籍と職業とを捨てて、しかも故国のマルチニック島の革命運動ではなく、〈黒い皮膚〉を分け持つどころか、これを憎んですらいる回教徒異民族の革命運動に参加する、という一見奇矯な選択が、ファノニズムとどのようにかかわっているか、をも検討すべきであろう。だが同時に、『黒い皮膚、白い仮面』から『アフリカ革命のために』に至るまでの一貫性を無視することもできない。この点に今は詳しくふれる余裕はないが、『黒い皮膚、白い仮面』の最後にかいまみられる〈人間〉の立場、いいかえれば〈普遍〉への断乎とした賭けこそ、ファノンの全生涯の思想と行動の核をなしているように思われる。アルジェリアという一つの〈特殊〉への徹底的な加担、マニケイズムと受けとられかねない暴力論の構築、これらは根源における〈普遍〉への意志が確立していたからこそ可能だったのではないかと考えられるのである。

最後に、この書に寄せられた、フランシス・ジャンソンの二つの文章——一つは序文として1952年に、一つはあとがきとして1965年の再刊に際して——について一言ふれておきたい。おそらくジャンソンは、ファノンによって突きつけられた問題を、一人の白人として、抑圧民族の一員として、正当に受けとめえた数少ないヨーロッパの知識人の一人であつたろう。正当に、とは、ファノンが抉り出した黒人の、被抑圧民族の疎外を、白人の、抑圧民族の疎外として身に引き受けた、という意味においてである。ファノンが被抑圧民族の側から、アルジェリア革命を通して〈普遍〉への超克を意欲したとするなら、ジャンソンは裏切者として抑圧民族の側から、同じく〈普遍〉に賭けたということができよう(いわゆるジャンソン機関の活動については日本でも何回か紹介されている)。この意味においても、ジャンソンこそファノンについて語りうる最適の人間であった。しかしジャ

ンソンのあとがきがわれわれに明かすものは、彼らの出会いの厳しさである。「われわれは一度として友人であったことはなかった」とジャンソンは述懐する。ジャンソンの活動に対し、ファノンには終始批判的であつたらしい。にもかかわらずこのあとがきは、ファノンに対する全面的な共感に支えられ、序文とあわせて、充実したファノン論となっている。

(なお、日本におけるファノンの紹介としては、堀田善衛、鈴木道彦両氏による「アジア、アフリカにおける文化の問題」——岩波講座〈現代〉第10巻『現代の芸術』内——がある。『飢えたる者』における暴力論と民族文化が主として取り扱われている。)

Franz Fanon : *Peau noir, masques blancs*, Edition du Seuil, 1952, 1965.